

リフネ、トチバニンジン、ツルネコノメソウなどが草本層をつくり、ホウチャクソウが可憐な花を咲かせ、イヌガンソクやヘビノネゴザなどのシダ植物が大きな葉を広げている。日当たりのよい道路わきでは、樹高1～3mのアオハダ、マユミ、ケナシャブデマリ、ウツギ、ミズキ、ガマズミ、ミヤマウグイスカグラ、リョウブ、コゴメウツギなどがマント群落をつくっている。

頂上付近の植物

五十人山には頂上が2つあるが、そのうちの北側のものが葛尾村と都路村の境となっている。この頂上近くの北側斜面に貴重なブナ林が残っている。直径20～30cmのミズナラも混じっており、かつてこのあたりのブナが伐採されたことを示している。数が少なく珍しい樹であるといわれるオオウラジロノキも見られ、春にはリングオに良く似た花を咲かせる。林床にはヤマツツジやミヤマガマズミ、マンサクなどが低木層をつくり、草本層にはチゴユリ、イヌヨモギ、キバナアキギリ、オヤリハグマ、マキノスミレ、オヤマボクチ、ツルリンドウ、アズマスゲなどのほか腐生植物であるギンリョウソウも見られる。

2つの頂上間の鞍部の斜面は低木林、底は草地



ヒメイズイ(ユリ科)

となっており高い木がほとんど見られない。この原因としては、かつて放牧地であったということと、冬の季節風が樹木の成長を阻害していることが考えられる。このことは鞍部の東端のアカマツが偏形樹となっていることから推察される。

風衝低木林を構成しているのはナツハゼ、ミズナラ、リョウブ、ヤマツツジ、ツクシハギ、ツノハシバミ、ベニバナツクパネウツギなどである。5月下旬から6月上旬にかけてはレンゲツツジが満開となり、これに合わせて催しものも行なわれる。

鞍部のほぼ中央にはミズメの高木が立っている。